

今日も世界で誰かは死んでいる

(原文)

望月 かれん (14 歳)

東京都

東京学芸大学附属中学校

「生きている」ということは自分の身近にいる人が突然いなくなって気づくことだと私は考える。映画などの画面の中ではなく現実で起こるふとした時にその人がいないと感じる感覚、これが私にとって「生きている」と思う時だ。

私にはインターネット上に世界中の沢山の友達がいるのだが、半年前までは中東に住んでいる友達とはつながりが全くなかった。というのも言葉が通じないだろうし、なんとなく怖いイメージもあったからだ。しかしある時テレビで日本にいる難民についての実態を伝えている番組があった。その時に日本が難民申請を全然受け入れていないことや収容所での生活のひどさ、そして日本ではクルド人の難民は受け入れていないということを知り、とてもショックを受けた。初めは沢山の人の命が難民申請できないことによって救えなくなってしまっているのではないかとただ不満を抱いていたが、国際的な大きな問題につながっていたので、まだ影響力のない私には国を変えられる力はほとんどないに等しい。そのためインターネット上で向こうの人とつながり、話すところから始めていくことにした。そのことをインターネット上にあげると私の友達の中に英語を話せるクルド人の女の子を知っている人がおり、「きっと気が合うと思う。」と言ってくれた。そのクルド人の名前はアスヤという明るい子で彼女曰く、自分の名前はトルコではかなり多い名前であると言っており、私と趣味のよく合う子だった。リアルタイムで話せることは少なかったがお互いの日常や最近の〇〇などテーマを決めて話していた。その中で住んでいるところが違っても結局みんなティーンエイジャーなのだということを改めて実感した。そして、彼女が住んでいた区域は他よりも安全な場所だと言っていたので、いつかは会える日がくるだろうと彼女は言っていたので、顔を合わせてもっとたくさんのお話をすることを楽しみにしていた。

しかし、ある日を境に彼女との連絡がぱったりと途絶えた。久しぶりの電話でお互いが好きなアーティストについて話し「あなたにとって明日ではないかもしれないけれどまた明日ね！」という彼女の言葉を機に連絡が一つも来なくなった。毎回私たちは通話を録音していたので聞き返してみると銃声がわずかだが聞き取れた。しかし彼女の声は焦っている様子もなかったのでスマホが壊れてしまったのだろうとそのときはのんきに考えていた。しかし数日後、彼女の両親から電話が来て「私たちが留守の間に家が襲撃にあっけし、アスヤは弟を庇って死んでしまった。あなたの話はここ最近で一

番聞いていたから連絡をした。」ということを知った。彼女が泣きながら伝えてくれた。そして最後に彼女に別れを告げるか聞かれたので、戸惑いはあったが別れを告げた。小さい頃に見た親族の安らかな顔とは違った。

今でもかすかな銃声が大きくなってゆき、そして彼女が「助けて。」と私に訴え体を丸めている夢を見る。私の声は届かない。もしも、私があ那时的電話の最後に「逃げて！」と一言伝えられていたら今でも連絡がとれてカラカラと笑う彼女の声が聞けていたのか。彼女はどこかの偉い人のくだらない欲望によって死んだのだ。それは今でも許せない。だがいつまでも悩んでいても仕方がない、その事実は変わらないのだ。今はそう考えられるようになった。彼女の死がなければきっと親友や家族を失ったときにどうすればよいのか考えられなかっただろう。

命、それは私たちが「生きる」にあたってとても大切である。ゲームのようにもう一度生き返ることは不可能だからだ。もし殺されたとしても死に対して憎むという感情だけは持つてはいけない。そんなことを教えてくれた大切な友人に感謝を述べたい。